

第二 問

次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。中納言は亡き父が中国の御門みかどの第三皇子に転生したことを知り、契りを結んだ大將殿の姫君を残して、朝廷に三年間の暇いとまを請い、中国に渡った。そして、中納言は物忌みものいで籠もる女性と結ばれたが、その女性は御門きよかどの後であり、第三皇子の母であった。后は中納言との間の子（若君）を産んだ。三年後、中納言は日本に戻るようになる。以下は、人々が集まる別れの宴で、中納言が后に和歌を詠み贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

忍びがたき心のうちをうち出いでぬべきにも、さすがにあらず、わりなくかなしきに、皇子みこもすこし立ち出でさせ給ふに、御前なる人々も、おのおのものうち言ふにやと聞こゆるまぎれに、

ふたたびと思ひ合はするかたもなしいかに見し夜の夢にかあるらむ
いみじう忍びてまぎらはかし給へり。

夢とだに何か思ひも出でつらむただまぼろしに見るは見るかは

忍びやるべうもあらぬ御けしきの苦しさに、言ふともなく、ほのかにまぎらはして、すべり入り給ひぬ。おぼろけに人目思はずは、ひきもとどめたてまつるべけれど、かしこう思ひつつむ。

内裏うちより皇子出でさせ給ひて、御遊びはじまる。何のものの音もおぼえぬ心地すれど、今宵こよをかぎりと思へば、心強く思ひ念じて、琵琶ひば賜はり給ふも、うつつの心地はせず。御簾みすのうちに、琴きんのことかき合はせられたるは、未央宮ひやうかうにて聞きしなるべし。やがてその世の御おくりものに添へさせ給ふ。「今は」といふかひなく思ひ立ち果てぬるを、いとなつかしうのたまはせつる御けはひ、ありさま、耳につき心にしてみて、肝消えまどひ、さらにものおぼえ給はず。「日本に母上をはじめ、大將殿の君に、見馴みなれしほどなく引き別れにしあはれなど、たぐひあらじと人やりならずおぼえしかど、ながらへば、三年がうちに行き帰りなむと思ふ思ひに

なぐさめしにも、胸のひまはありき。これは、またかへり見るべき世かは」と思ひとぢむるに、よろづ目とまり、あはれなるをさることにて、後の、今ひとたびの行き逢ひをば、かけ離れながら、おほかたにいとなつかしうもてなしおぼしたるも、さまことなる心づくしいとどまさりつつ、わが身人の御身、さまさまに乱れがはしきこと出で来ぬべき世のつつましさを、おぼしつづめることわりも、ひたぶるに恨みたてまつらむかたなければ、いかさまにせば、と思ひ乱るる心のうちは、言ひやるかたもなかりけり。「いとせめてはかけ離れ、なさけなく、つらくもてなし給はばいかがはせむ。若君のかたさまにつけても、われをばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」と、推し量らるる心ときめきても、消え入りぬべく思ひ沈みて、暮れゆく秋の別れ、なほいとせちにやるかたなきほどなり。御門、東宮をはじめたてまつりて、惜しみかなしませ給ふさま、わが世を離れしにも、やや立ちまされたり。

〔注〕 ○琴のこと——弦が七本の琴。こと

○未央宮にて聞きしなるべし——中納言は、以前、未央宮で女房に身をやつした後の琴のことの演奏を聞いた。

○その世——ここでは中国を指す。

○東宮——御門の第一皇子。

○わが世——ここでは日本を指す。

設 問

(一) 傍線部ア・ウ・キを現代語訳せよ。

(二) 「ただまぼろしに見るは見るかは」(傍線部イ)の大意を示せ。

(三) 「たぐひあらじと人やりならずおぼえしかど」(傍線部エ)とあるが、何についてどのように思ったのか、説明せよ。

(四) 「よろづ目とまり、あはれなるをさることにて」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(五) 「われをばひたぶるにおぼし放たぬなんめり」(傍線部カ)とあるが、なぜそう思うのか、説明せよ。